

座談会開催

50号の発刊にあわせて、現役編集委員会メンバー（オブザーバー参加含む）で創刊号を手元において座談会を5月9日に開催しました。昔話や今後の「ちゅーりっぷの風」をどうするか？といった様々なお話しをお聞きください。

【創刊号から読み取る、先輩の思い】



石橋：「ちゅーりっぷの風」は2003年1月に創刊号が発刊され、「発刊にあたって」というメッセージの中で、神谷（かみや）会長がこのように語られています。「単に福祉に関する知識情報の周知にとどまることなく、一人一人の限られた力の民生委員が互いに顔を知り、心を通い合わせ、これらの取組みに力を合わせていくことは大変重要なことだと思っています。今回の機関紙の発刊は、まさにそうした今後の民生委員活動に大きな役割を果たすものと確信いたしております。」

一般の市民や区民の方に民生委員の活動を知ってもらうPR誌でなく、民生委員同士の相互理解のために企画されたことが読み取れます。

送付先も民生委員、名誉民生委員、市推薦委員会委員、区推薦委員会委員、区役所（区長や職員）、社協などに限られているようです。民生委員の先輩からは「購読をとっても楽

しみにしています。」というお声をいただくこともあります。大阪市民児協のなかでも、このような会報誌は旭区と此花区だけのようです。

発刊時から関わってこられた、見澤さん、スタートしたのはどのような経緯があったのですか？

見澤：当時の福祉課長の山本恒俊さんの発案でした。山本さんはアイデアマンで、民生活動の活性化にとっても尽力されていました。当初7名でスタートし、途中から飯野さんのお父さんが加わって8名で続けてきました。今は編集委員会ですが、当時は編集部という部の扱いでした。

長谷川：山本課長はとても熱心な方でしたね。お亡くなりになられたときに、とても残念に思いました。「ちゅーりっぷの風」第2号で主任児童委員の子育て支援としての「親子なんでもナイター相談」について記事にしましたが、これも山本課長の発案でした。

石橋：影山さんが昔の編集部の写真に写っていますが、編集委員は長いのですか？

影山：私は、はじめ子育て担当でした。角林さんが編集委員会に入られるときに、一緒にやりませんか？とお誘いいただきってから「ちゅーりっぷの風」に関わっています。

長谷川：私の編集委員会に関わる前の印象は、集まる回数も多いし、外からみると「大変だ」と思っていました。

見澤：中のメンバーはとても楽しみながら紙面を作っていて、仲も良かったですよ。朝から集まって編集をはじめて、いったんお昼を食べに帰って、食べ終わったらまた昼から集まって。1日仕事で、そんな日が何日か続くこともありました。

石橋：私は他の委員会の経験がないので比べられないのですが、苦勞をしながらも原稿集めをして、編集して仕上げたものができあがって形に残る。そんなやりがいはこの委員会にはありますね。また、発刊し終わったあとの打ち上げがとても多い(笑)。飲みにケーションが活発で委員同士の仲が良い。それもこの委員会の魅力だと思います。

【紙面の内容や企画について】

石橋：今回、過去の「ちゅーりっぷの風」を見返しましたが、人物往来、地区活動、委員会活動などはずっと続いていますね。最近ない企画にはペットを紹介する「かわいい家族」や川柳・俳句・短歌、暮らしのヒントなどがありました。匿名投稿もあったことに驚きました。やはり一番の理想は、記事を無理やり書いてもらうのではなくて、投稿



当時の福祉課長
故 山本恒俊さん